

4-6 熊本県頭地下手遺跡出土の擦切石斧について

山崎純男 ※

1 はじめに

擦切り技法とは「扁平な原材の両面から表裏対応する位置に溝をすりくぼめて作り、ついに切断しうるようにする手法」(小林 1959)という加工技術をいい、その擦切り技法で製作された代表的な石器が擦切石斧と呼ばれている磨製石斧である。

擦切石斧は、日本列島では縄文時代に磨製石斧の製作技術として存在することがわかっている。北海道の早期例を初現として、東北、北陸、中部、近畿東部へと順次、時間を経過しながら南下し、中部・近畿地方では中期～後期に盛行する。石材は蛇紋岩や片岩系の緑色の石等多用されている。これら擦切石斧は、石材の共通性や地理の分布等から、擦切石器の盛行するシベリア、中国東北地方と系統的な関連性が早くから説かれており(鳥居 1929)、一部に慎重論があるものの(芹沢 1965)、その始源はシベリア・バイカル湖周辺の新石器時代の擦切石器に求められている。

筆者が学生時代に熊本県北部の菊池川流域における縄文時代遺跡を現地踏査した際、鹿本町在住の本田氏の資料中に、擦切石斧原石があることを確認した。九州にも擦切石斧が存在することを初めて知り、強い興味を覚えた。この向原遺跡から表採された擦切石斧は、本田氏の承諾を得て図化した。そして、九州における擦切石斧について類例を探索したところ、熊本県今村貝塚採集品と鹿児島県市来貝塚出土品の2例があることがわかった。以後、遅々としてではあるが類例の増加がみられる。

2013年7月25日、宮崎敬士氏に会ったときに、かつて熊本県が発掘調査した頭地下手遺跡出土品の中に擦切石斧1点がある、との教示を受け、8月8日、擦切石斧を実見した。

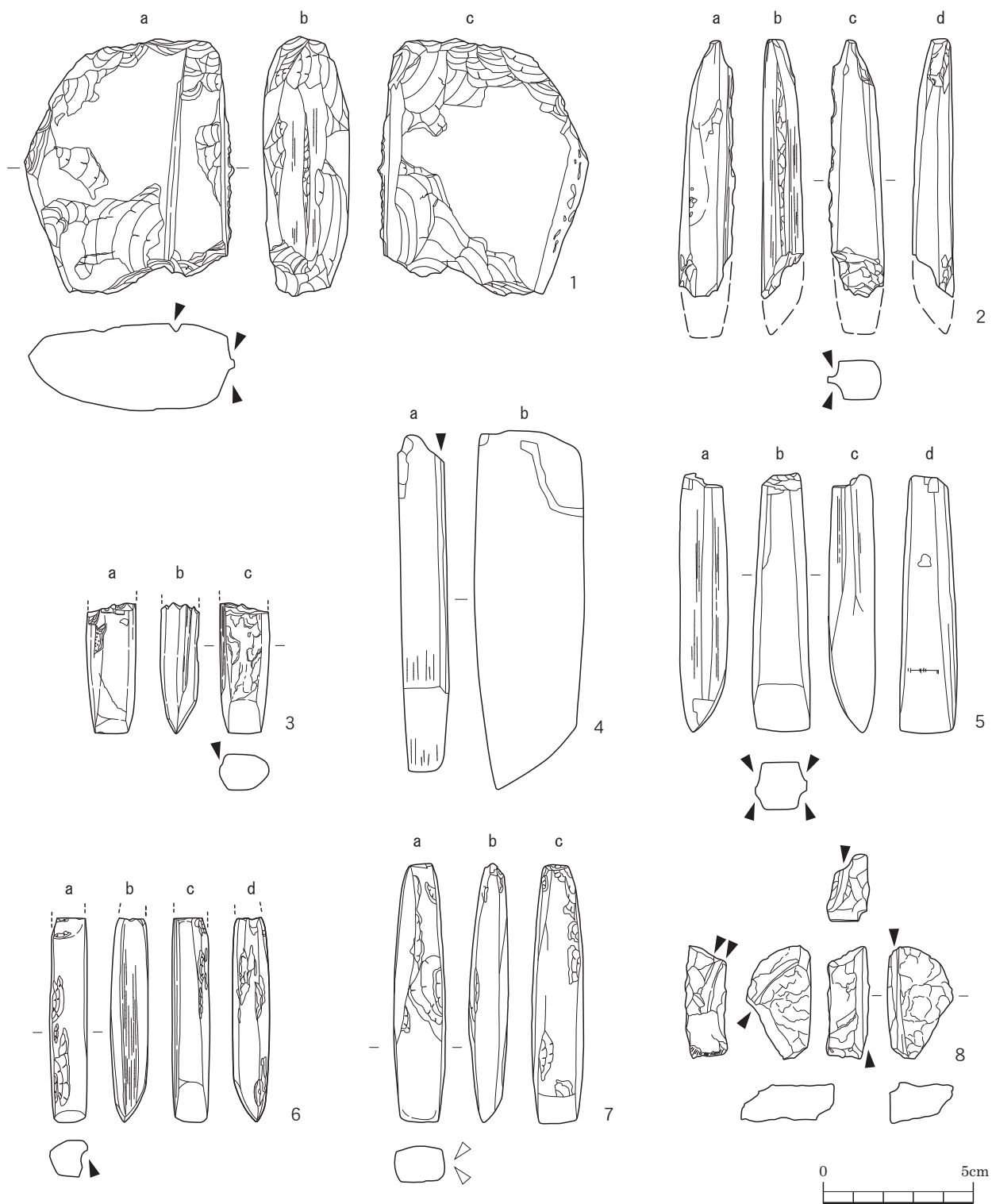
現在、九州における擦切石斧出土遺跡は頭地下手遺跡例も含めて7遺跡、擦切石斧の製作工具である擦切り具の出土遺跡は24遺跡を数えるまでになり、その分布範囲、伝播経路等にある程度の見通しがついてきた。については、頭地下手遺跡の擦切石斧の紹

介を兼ねて、あらためて九州における擦切石斧について検討を加えることにする。

2 頭地下手遺跡の擦切石斧

頭地下手遺跡から出土した擦切り痕をもった明確な擦切石斧は1点(RQ832)であるが、他にもう1点、擦切り痕は残していないが、擦切り技法で制作された可能性の強い磨製石斧(RQ833)があるので、併せて紹介する。

RQ832(Fig.1-6)はV区SD1の黒色土から出土した小型で方柱状のノミ形の磨製石斧である。淡い緑色の地に濃い黒青色の斑文があり、基部付近は若干黄色がかった良質の蛇紋岩を素材として利用している。石斧は全体に良く研磨されているが、片側の側辺にはわずかながら部分的に剥離痕が残っている。この剥離痕は擦切石斧原石を製作する段階の第1次の調整剥離痕と考えられる。他の側面には剥離痕は見られず、擦切り痕と切断面のバリを取り除くための研磨がみられる。それからすると、この石斧は原石から最初あるいは最後に切断された石斧と考えることができ、同一原石から複数個体の石斧が製作されたとみられる。擦り切りは平面の片側の一面(Fig.1-6-c面)からのみ行われているために切断部のバリと擦切り溝は、擦り切りが施された反対の面近くに段状の浅い溝として残っている。(九州の他の擦切石斧は両面から擦切り溝を入れ、折り取る手法がとられ、切断部のバリは側面の中央部に残る例が多いが、それからすると本例は異例である。ただし、切断を容易に完全に行うために反対面にも浅い擦切り溝が入れられていて、それが後から加えられた調整の研磨によって完全に消失した可能性は否定できない。)切断部はあとから加えられた調整の研磨による変形によって遺存状態は良好でない。擦切り溝は後からの研磨によって側面の中央部にかろうじて残っているに過ぎない。擦切り溝内には石斧の長軸に平行した条線が明瞭に残っている。調整の研磨は同一の面で行われ、擦切り溝を挟み込むような状態で存在する。研磨痕は石斧の長軸に対して直交していて、擦切り痕との区別は容易である。石斧の刃部はい



1 向原 2 今村貝塚 3 麦之浦貝塚 4 市来貝塚 5 草野貝塚 6 頭地下手 7 頭地下手（推定） 8 桑原飛櫛貝塚（参考）
 ※ 実測図 4、5 は報告書掲載図を再トレースした。

Fig.1 擦切石斧実測図

わゆる片寄り刃である。a面の刃部形成の研磨は浅く、研磨の稜線は不明瞭で使用により滑らかで、刃部に直交した条線が確認できる。反対のc面では刃部形成の研磨は深く大きい。研磨面には刃部に平行した条線が確認できる。これらは製作によるもので、使用痕と考えられるものは刃部に接して刃部に直交する非常に短い条線が右側に片寄って遺存する。基部は一部折れて欠損している。欠損後は再生が試みられ、基部を丸くするために基部周辺には研磨によって面取りが行われ、基部の切断部にもわずかであるが研磨が加えられている。元来、石斧はあと数cm長かったと考えられる。石斧の形態、刃部形態、使用痕から用途を推考すれば弥生時代の柱状片刃石斧同様に使用されたものと考えられる。なお、擦切り痕から復元できる擦切り具は厚さが5mm前後の板状をなし、刃部は鋭くなく丸みを持っている。石斧は現存長6.8cm、幅1.25cm、厚さ1.25cm、重量16.7gを測る。

RQ833 (Fig.1-7) はIV区C2グリッド下層から出土した小型で方柱状のノミ形の磨製石斧である。淡い緑色の地に濃い黒青色の斑文があり、基部付近は若干黄色がかった良質の蛇紋岩を素材として利用している。石材は前者と質、色共に極めて類似していて同一の石材、さらに突きつめれば同一の原石から擦切り技法によって切断されて製作された兄弟石斧の可能性は極めて強い。石斧は全体に良く研磨されているが、擦切り面の両面には若干の剥離面が残っている。両側面には剥離痕はなく長軸に対して斜方向の研磨が丁寧に加えられているので、たとえ擦切り技法で製作されていたとしてもその痕跡を見出すことはできない。石斧は平面形が細長い長方形であるが、胴部中位でやや膨らみ、刃部・基部の両端部に向かってわずかにせまくなる。刃部はRQ832同様に片寄り刃をなす。刃部形成はa面では刃部に向かって緩やかに研ぎこまれているので、刃部形成のための研磨痕の稜線は確認できない。刃部近くで不明瞭ながら稜線が確認できるが、これは使用によってできた可能性が強く、刃部に対して直交する条線が確認できる。c面では刃部形成の研磨痕は明瞭に残っている。刃部の上部約1cmの箇所には長軸に直交した横一直線の稜線が明瞭に確認できる。研磨の方向は稜線と同じである。また、刃部には使用

痕とみられる縦方向の条線が確認できる。刃部形態もRQ832同様である。基部はやや尖り気味におさめようとするために基部周辺には研磨によって面取りが行われている。基部の一部には部分的に白色に変色した風化面がみられる。長さ8.6cm、幅1.2～1.7cm、厚さ1.3cm、重量29.7gを測る。

RQ832、833は出土地点が異なるが、共伴する出土土器は市来式土器を中心とした縄文時代後期中頃の土器であり、両者は共に該期に比定されよう。

3 九州における擦切石斧と擦切り具の諸例

3-1 擦切石斧の諸例

九州から出土した擦切石斧は6例が知られていた。これに頭地下手遺跡例が加わり、7遺跡7例となる。また、擦切り技法に関連する参考1例がある。

以下、既知6例、参考1例について、その概略を述べることにする。

(1) 向原遺跡 (Fig.1-1)

熊本県山鹿市鹿央町合里向原

向原遺跡は熊本県の北部、菊池川流域に発達した火山灰台地上に立地し、表面採集資料に早・後・晩期の遺物がある。鹿本町在住の本田氏資料中に見いだした擦切石斧原石である。採集場所は後・晩期の遺物が多く、所属時期は後・晩期の可能性が強い。

本資料は擦切石斧製作途中の原石で、九州では唯一の例となる。やや黒みをおびた蛇紋岩を素材としている。長さ8.5cm、幅7.0cm、厚さ1.6～2.9cmの方形をなす。上辺に打裂が加えられ下辺は大きく割れて欠損部がある。全体に粗い研磨が施され、擦切面を整えている。研磨方向は面毎に一定する傾向にあるが、部分的に異方向の研磨がみられる。長側辺a面右側にはa、cの両面から擦切り溝が加えられ、折り割られた痕跡が明瞭に残っている。擦切り面b面の観察では、まずa面に溝を入れ、次いでc面から擦切り溝を加え、原石の両端部が擦切られた後、わずかに残った接合部が折り割られるという順序がわかる。さらにa面に折割り部にほぼ平行に次の石斧のための擦切り溝が入れられている。擦り切りと溝の間隔は1.2～1.7cmで、基部が狭く、刃部

がやや幅広である。擦切り溝は現存長さ 7.0cm、幅 0.3cm、深さ 0.3cm、断面形は、底がやや丸みをもつ V 字形をなす。この原石から作られる石斧は幅からみて、後述する今村貝塚例や麦の裏貝塚例とほぼ同様のノミ形石斧とみられる。

(2) 今村貝塚 (Fig.1-2)

熊本県熊本市南區城南町今

今村貝塚は熊本平野の南部、阿高貝塚と御領貝塚という著名な両貝塚に程近い丘陵上に位置する後期の貝塚で、表採資料に擦切石斧 1 点がある。これは九州では最も早く擦切石器と認識された資料であり、



Fig.2 擦切石斧出土遺跡分布図

Tab.1 九州出土の擦切石斧

番号	名称	所在地	立地	出土品	数量	時期
1	向原遺跡	熊本県山鹿市鹿央町合里	台地縁辺	擦切石斧原石	1	後・晩期
2	今村貝塚	熊本県熊本市南区城南町今	丘陵端部	擦切石斧	1	後期
3	麦之浦貝塚	鹿児島県薩摩川内市陽成町後迫	舌状台地	擦切石斧	1	後期
				擦切石斧（推）	2	後期
4	市来貝塚	鹿児島県いちき串木野市市来町川上	舌状台地	擦切石斧	1	後期中頃
5	草野貝塚	鹿児島県鹿児島市下福元町草野賀呂	海岸段丘	擦切石斧	1	後期中頃
6	芝原遺跡	鹿児島県南さつま市金峰町宮崎芝原	自然堤防	擦切石斧	1	後期
7	頭地下手遺跡	熊本県球磨郡五木村頭地甲	河岸段丘	擦切石斧	1	後期
				擦切石斧（推）	1	後期
参考	桑原飛櫛貝塚	福岡県福岡市西区元岡	丘陵端部	翡翠原石	1	後期初頭
合計					7	

※ 合計には、推定、参考資料を含まない。

1965年に刊行された『城南町史』では「粘板岩の石斧の未成品で、擦切りによって切断され、棒状の本体の側縁に、ひれ状の部分がまだのこっている。」と記述されている（三島 1965）。小林久雄コレクションの資料で、現在、熊本市立塚原歴史民俗資料館に保管されている。実見したところ、本資料は報告されているような未製品ではなく、刃部を欠損しているものの完全な製品である。石材は淡い緑色の蛇紋岩、現存長 8.6cm、幅 1.4 ～ 1.8cm、厚さ 1.5cm の方柱状をなす。長側の一辺（a 面右側）に擦切り痕が明瞭に残っている。b 面の擦切り面の観察からは、先ず a 面に擦切り溝を入れ、両端部を擦り切った後、わずかに残った接合部を折り割り、さらに折割り部に研磨を加えるという擦切工程が読み取れる。折割り部には研磨が加えられるものの完全ではなく、ヒレ状に擦切り部の張り出しが残っている。擦切り溝は断面から復元すると、幅 0.5cm 前後、断面形は U 字形をなす。a 面左側辺には擦切の痕跡はなく、d 面にみられるように丁寧な研磨が加えられている。部分的に研磨の剥離痕が残っていることからみて、元々、擦り切りは施されていないと考えられる。そうすれば、この石斧は原石から最初に切り取られたものか、あるいは最後に残ったものを利用したとみることができる。刃部は欠損するが、他例から片刃状になると考えられる。遺跡の状況から後期後半の時期に所属するものであろう。

(3) 麦之浦貝塚 (Fig.1-3)

鹿児島県薩摩川内市陽成町後迫

麦之浦貝塚は川内川の支流の高城川、さらに、その支流の麦の浦川の右岸、南に延びた舌状台地の

に立地している。海岸までの直線距離は約 7km である。1983 年、川内市教育委員会によって発掘調査が実施されている（中島・牛濱・長谷川 1987）。

擦切石斧 1 点とその可能性がある石斧 2 点がある。Fig.1-3 は淡い緑色で部分的に黒緑色の斑点のある蛇紋岩を素材としている。半折し、基部を失い、刃部は片刃状をなす。a 面右側辺に擦切り痕が浅い溝となり残っている。折り割られた部分は丁寧に研磨されている。左側辺には擦切り痕はなく、断面形も丸くなるため、もともとこの面には擦り切りは施されていないと考えられる。この石斧は原石から最初に切断されたか、最後に残ったものを利用している。全体にやや風化しており、製作痕は不明瞭である。刃部には使用痕とみられる小さな剥離痕がある。現存長 4.3cm、幅 1.2 ～ 1.6cm、厚さ 1.3cm。後期の松山式、市来式土器に共伴する。

(4) 市来（川上）貝塚 (Fig.1-4)

鹿児島県いちき串木野市市来町

川上貝塚は鹿児島半島の基部、八房川の南岸に位置する貝塚である。大正 9 年の発見以来、数次に及ぶ発掘調査が行われている。1961 年度の発掘調査でノミ形の擦切石斧 1 点、擦切り具 3 点、1990 年の発掘調査で擦切り具 1 点、1992 年の発掘調査で擦切り具 5 点が出土している（河口 1991）。ノミ形の擦切石斧については河口貞徳氏のスケッチ図がある。図で見ると厚みが有り、弥生時代の柱状片刃石斧に近い。擦り切りは刃部形成面に施されていると見られる。同様の石斧は擦り切りの痕跡はないが、草野貝塚に例がある。

(5) 草野貝塚 (Fig.1-5)

鹿児島県鹿児島市下福元町草野賀呂

草野貝塚は薩摩半島の中央部、シラス台地が錦江湾に向かって傾斜する箇所に立地し、1951年の発見以来、4次の発掘調査が実施されている。1951年の調査で擦切り具3点、1981～82年の調査で擦切石

斧1点、擦切り具14点が出土し、九州では最も多量に擦切り技法の関連資料が出土している。(出口・中村編 1988)

Fig.1-5は擦切石斧である。刃部は研磨の稜線は明瞭ではないが片刃状をなす。刃部端には使用痕と思える短い条線が刃部に直交して入り、磨滅し光沢



Fig.3 擦切具出土遺跡分布図

Tab.2 九州出土の擦切り具

番号	名称	所在地	立地	出土品	数量	時期
1	黒橋貝塚	熊本県熊本市南区城南町下宮地	丘陵端部	擦切り具	1	中～後期
2	御領貝塚	熊本県熊本市南区城南町東阿高	丘陵端部	擦切り具	1	後期末
3	大矢遺跡	熊本県天草市本渡町広瀬大矢	砂丘	擦切り具	5	後期初頭
4	一尾貝塚	熊本県天草市五和町御領浜田	砂丘	擦切り具	3	後期中頃
5	沖ノ原貝塚	熊本県天草市五和町二江沖ノ原	砂嘴	擦切り具	1	後期前半
6	有喜貝塚	長崎県諫早市松里町	丘陵	擦切り具	2	後期初頭
7	深堀遺跡	長崎県長崎市深堀町	砂丘	擦切り具	1	晩期前半
8	野首遺跡	長崎県北松浦郡小値賀町野崎郷西平	丘陵麓	擦切り具	2	
9	ヌカシ遺跡	長崎県対馬市豊玉町ヌカシ	扇状地	擦切り具	1	中期後半
10	下鶴遺跡	鹿児島県伊佐市大口下殿字下鶴		擦切り具		
11	市来貝塚	鹿児島県いちき串木野市市来町川上宮之後	丘陵	擦切り具	9	後期中頃
12	大野遺跡	鹿児島県日置市田布施村	砂丘	擦切り具	2	後期中頃
13	若宮遺跡	鹿児島県鹿児島市池之上町	丘陵	擦切り具	2	後期中頃
14	草野貝塚	鹿児島県鹿児島市下福元町草野賀呂	台地	擦切り具	17	後期中頃
15	山ノ中遺跡	鹿児島県鹿児島市西別府町山ノ中		擦切り具	8	
16	宮ノ上遺跡	鹿児島県南九州市川辺町古殿		擦切り具	1	晩期前半
17	榎崎A遺跡	鹿児島県鹿屋市郷之原町榎崎	舌状台地	擦切り具	1	
18	榎木原遺跡	鹿児島県鹿屋市高須町榎木原	台地	擦切り具	4	
19	宮之迫遺跡	鹿児島県曾於市末吉町南之郷	舌状台地	擦切り具	5	中期～後期
20	桐木耳取遺跡	鹿児島県曾於市末吉町諏訪方桐木	台地	擦切り具	1	
21	小淵遺跡	鹿児島県志布志市志布志町帖	河岸段丘	擦切り具	1	後期中頃
22	渡畑遺跡	鹿児島県南さつま市金峰町宮崎渡畑	自然堤防	擦切り具		後期前半
23	芝原遺跡	鹿児島県南さつま市金峰町宮崎芝原	自然堤防	擦切り具		後期前半
24	柁原貝塚	鹿児島県垂水市柁原柁原下	海岸段丘	擦切り具		後期中頃
合計					68	

※ 合計は、筆者が実見し、計数した資料数である。

をもっている。基部は一度折れたものを再生したらしく、一部に研磨が施されている。この折れた部分の、刃部形成面とは逆の面（d 面）にわずかに抉り状の凹みがつけられている。この部分は製作痕が磨滅し、光沢がある。より上位に着柄のための浅い抉りがあったと考えられる。なお、再生された基部より約 2cm 下がったところより下位の 1.5cm の間も、製作痕が磨滅し光沢があるので、再生後の着柄による緊迫部分と考えられる。両側は直線的で、共に擦切り痕が残っている。b 面左側辺（a 面）は全面に擦切りの痕跡が残り、刃部近くでは擦切り痕にずれがみられる。右側辺 c 面は上半部に擦切り痕が残る。折割り部分は a、c 面共に 3mm 前後である。折り割った後、丁寧に研磨が加えられているが、ヒレ状の隆起帯として残っている。断面を見ると、擦り切りが若干ずれていることがわかるが、全体に精美な作りの石斧である。素材は黒色の強い蛇紋岩で、斑点状の緑色部分がある。長さ 8.3cm、幅 1.4 ～ 1.9cm、厚さ 1.2 ～ 1.5cm を測る。

(6) 芝原遺跡

鹿児島県南さつま市金峰町宮崎芝原

芝原遺跡は鹿児島県の南西部、鹿児島県南さつま市金峰町宮崎字芝原に所在する。鹿児島市の南部に位置する美濃岳南麓に源を発する万之瀬川の右岸の自然堤防上に立地している。遺跡は河口から約 6km さかのぼり、標高 5m 前後である。

縄文時代後期前半の拠点集落と考えられ、多量の遺物が出土している。東日本的遺物である足形土器や組合せ石鉾が多量に出土していて注目される。ここから蛇紋岩製でノミ形の擦切石斧 1 点が出土している。実見していないので詳細不明（註 1）。

(参考) 飛櫛貝塚 (Fig.1-8)

福岡県福岡市西区元岡

福岡市教育委員会によって発掘調査が実施され、貝層中より翡翠原石 1 点が出土している（井澤 1996）。

この原石は長さ 3.8cm、幅 2.3cm、厚さ 1.2cm を測る三角形の板状をなし、全体に淡い緑色を呈し、透明度の強い良質のものである。長辺と短辺の各一辺に擦り切りの痕跡を残している。これは原石の形

状を整えるためにいれられた打割用擦切り溝と見られる。擦切り溝から復原される擦切り具の厚さは0.8cmである。丹念な水洗選別が実施されたが、翡翠は本例の他に玉1点があるにすぎず、この遺跡で翡翠の調整加工を行なった痕跡はない。よって、この翡翠原石は翡翠原産地で擦切り技法を用いて整形された後、本遺跡に持ちこまれた可能性が高い。翡翠は糸魚川産とみられる。貝層の形成時期は後期初頭であり、本例も同時期としてよい、と考えられる。

以上の擦切石斧とその関連資料をまとめると次のようになる。擦切石斧は原石、石斧共に蛇紋岩を素材としており、現在のところ例外はない。製品はいずれも柱状の片寄り刃の磨製石斧である。時期的には後期中頃～晩期前半に属する。このように、擦切り技法によって製作された製品の仕様が限定されていることに注目しておきたい。また、飛櫛貝塚の翡翠にみられる擦切り技法の痕跡は、九州に擦切り技法が伝播した時期を示唆するものとして重要である。

3-2 擦切り具出土遺跡

擦切り技法の工具として用いられる擦切り具は、まだ正しく認識されているとは言えない。発掘調査においても刃部のみに使用痕が残し、他はすべて自然面の場合が多いので見過ごされることが多いが、最近は注意されるようになり出土例も増加している。擦切り具の出土例は24遺跡68例以上であり、製品である擦切石斧に比べて多数の遺跡から出土している。その大部分は砂岩の板状石を素材としている。形状は様々で、整形したものは少ないが完存しているものでは長方形、石庖丁形等が存在する。出土数が多いので個別説明は省略し、出土遺跡とその数量、時期を示すにとどめる（Tab.2）。

4 擦切石斧と擦切り具の出土遺跡の分布

熊本県鹿央町で擦切石斧原石に出会ってから40数年経った現在、縄文時代の擦切り技法に関連した遺跡は、上記したように擦切石斧出土遺跡が7遺跡7例、擦切り具出土遺跡が24遺跡68例に達している（註2）。擦切石斧出土遺跡は擦切り具出土遺跡に比較し

てその数が四分の一と極端に少ないが、これは擦切石斧が仕上げ段階において切断部のバリや擦切り溝が痕跡を残さないまでに研磨された場合には当該製品を擦切石斧と認定できないためである。擦切石斧と認定できない石斧の中にも擦切り技法によって製作された石斧がかなり含まれていると考えられることに注意する必要がある。現実には、明確な決め手にかくものの擦切り技法で製作されたと考えられる資料がかなり存在する。しかし、それらについてはここでは提示を省略した。遅々としてではあるが資料は増加し、ようやく、その分布の概略が把握できるようになってきた。なお、福岡市西区桑原飛櫛貝塚からは翡翠の加工に擦切り技法が用いられている。本例は九州において擦切り技法を用いた最も早い例の一つであり、擦切石斧との関連性が考慮されるので併せて紹介した。これを含めて、以下では、その分布を見てみよう。

擦切り技法に関連した遺跡を分布図（Fig.3）に示した。擦切石斧は熊本県と鹿児島県でのみ確認されている。熊本県では向原遺跡、今村貝塚、そして頭地下手遺跡の3遺跡がある。今村貝塚は海岸部遺跡であるが、向原、頭地下手遺跡は内陸部遺跡であり、特に頭地下手遺跡は山間部遺跡である。向原遺跡からは擦切石斧原石が採集されている。擦切石斧原石は九州では唯一の資料であり貴重である。今村貝塚例も表面採集資料であり、共にその詳細は不明ながら、遺跡の状況からは後期後半～晩期前半の所産と考えられる。なお、擦切り具の存在は明らかでない。頭地下手遺跡では多量の石器が存在するにもかかわらず擦切り具が確認されていないので、当該遺跡で製作されたものではなく他地域からもたらされた可能性が強い。鹿児島県では麦之浦貝塚、市来貝塚、草野貝塚、芝原遺跡の4ヶ所から擦切石斧が出土している。麦之浦貝塚では製品のみで擦切り具は出土していない。前述の頭地下手遺跡と同様に他の遺跡から持ち込まれたものであろうか。市来、草野、芝原遺跡では多量の擦切り具が伴い、工具、製品が存在するので、製作も同遺跡で行われたと考えられる。いずれの遺跡も海岸部に近い遺跡である。以上のように、擦切石斧の分布は九州の中部以南の西海岸部周辺に散発的に分布している。

次に、擦切り具の分布について見てみよう。現在の

ところ、長崎、熊本、鹿児島県の三県にわたって遺跡が確認されている。長崎県では有喜貝塚、深堀遺跡、ヌカシ遺跡、野首遺跡の4遺跡6例がある。擦切石斧は現時点では確認されていないが、擦切り具は少ないながらも出土している。いずれの遺跡も海岸部の遺跡であることが注意される。時期的には中期から晩期前半に及んでいて、古い時期のものを含んでいることが注目される。熊本県では擦切石斧、石斧原石の他、擦切り具は黒橋貝塚、御領貝塚、大矢遺跡、一尾貝塚、沖ノ原貝塚の5遺跡11例が確認できる。擦切石斧と擦切り具との共伴例は認められないが、擦切り具出土遺跡は西海岸部の島嶼部と宇土半島基部の貝塚に集中してみられる。1遺跡あたりの石器数も増加していて、製品が内陸部に及んでいることを考慮すると長崎県よりもその技法がより浸透していたことが窺える。今後さらに遺跡数が増加するものと考えられる。時期的には後期初頭から後期末の遺跡があり、遺跡が古い段階に集まっていることも注目される。鹿児島県では擦切り具出土遺跡が集中して確認されている。遺跡は下鶴遺跡、市来貝塚、大野遺跡、若宮遺跡、草野貝塚、山ノ中遺跡、宮ノ上遺跡、榎坂A遺跡、榎木原遺跡、宮之迫遺跡、桐木耳取遺跡、小淵遺跡、渡畑遺跡、芝原遺跡、柗原貝塚等、15遺跡以上55例以上が確認されている。市来貝塚、草野貝塚では擦切石斧と擦切り具が共伴して出土している。また、市来貝塚、草野貝塚、山ノ中遺跡では10～20個に及ぶ擦切り具が出土していて、その使用頻度が高かったことがうかがえる。これらの遺跡は海岸部から内陸部まで及んでいて、その普及が進んでいたことがわかる。時期は中期から晩期にかけてであるが、集中するのは後期中頃である。

以上の擦切り技法関連遺跡の分布状況をまとめると次のようになる。擦切り技法関連遺跡の分布は、福岡県、長崎県、熊本県、鹿児島県の4県の九州西海岸部を中心として、一部内陸部にも広がっている。福岡県東部、大分県、宮崎県の東九州には分布しない。福岡県、長崎県の北部九州から西北九州にかけては、遺跡は散発的で、いずれも海岸部に分布している。中九州の熊本県は後述する南九州西海岸と北部九州から西北九州の中間的地位を示している。遺跡は若干増加す

る傾向にあり、海岸部遺跡が多いが製品は内陸部に及んでいる。鹿児島県西部の南九州西海岸部から内陸部にかけては遺跡が集中し、遺物量も多く、擦切り技法が定着して展開したことを示している。

5 擦切り技法の伝播とその意義

九州における擦切石斧と擦切り技法はどこから伝播したものであろうか。「1 はじめに」で示したように、その始原はシベリア・バイカル湖周辺の新石器時代の擦切石器に求められ、日本列島では縄文時代に磨製石斧の製作技術として存在することがわかっている。北海道の早期例を初現として、東北、北陸、中部、近畿東部へと順次、時間を経過しながら南下し、中部・近畿地方では中期～後期に盛行しているとされる。九州の擦切石斧もその延長上で理解するのが最も妥当な線であるが、そう理解するには解決すべき大きな問題が介在していた。一つは擦切石斧の西限である近畿東部以西から九州の擦切り技法関連遺跡の分布範囲の間には約700 kmの空白地域が存在していることである。加えて、九州の擦切り技法の開始が中期から後期初頭に求められ、中部・近畿地方でもほぼ同時期に始まることも理解しがたいものであった。

九州の擦切り技法の故地の探究を進めたが、なかなかその解答を得ることはできなかった。前述の空白地帯や最も可能性があると考えていた韓半島でも擦切石斧の出土はなかった。しかし、韓半島では1990年代になって漸く擦切り技法によって製作された石器が出土しはじめた。慶尚北道蔚珍郡厚浦里遺跡（国立慶州博物館1991）は径約4 mの不規則な窪地に人骨と石器が重なり合って存在した特殊な埋葬遺跡であるが、ここから出土した180点の磨製石斧のうち9点が擦切石斧であることが確認され、慶尚南道晋州市上村里遺跡（東亜大学校博物館1999）からも擦切石斧1点が出土した。また、擦切り具も凡方貝塚（釜山広域市博物館1993、1996）、新岩里遺跡（申1989）、牛峰里遺跡（沈1996）、鰲山里遺跡（任・権1984、1985、1988）校洞遺跡（金1963）の諸遺跡で砂岩製擦切り具が出土している。これらの出土遺物を背景にして、擦切り技法の一つの系譜の流れとして、バイカル湖周辺から中国東北地方を経由して、韓半島基部

の咸鏡北道から韓国の東海岸、北部九州、九州西海岸、トカラ列島、琉球列島にいたる考えを提示したことがある（山崎 1999）。

しかし、最近以上の考えを改めつつある。一つには、「東日本的遺物」について検討を加える機会があり、その成果（山崎 2012、2013）から日本列島内の伝播の延長上においても矛盾なく理解できるようになったこと。もう一つは、擦切石斧の西限である近畿東部以西から九州の擦切り技法関連遺跡の分布範囲の間の約 700 km の空白地域の間にあたる島根県板屋Ⅲ遺跡（Fig.2-A）、下山遺跡（Fig.2-B）の 2 遺跡でノミ形の擦切石斧の新例合計 3 点が加わったこと。以上の二つの理由によるものである。

東日本的遺物の九州への伝播は中期後半から始まり、そのルートは中部高地から日本海側に抜け、翡翠原産地である糸魚川・宮崎海岸を擁する北陸地方から日本海を陸沿いに西漸し、九州西海岸中央部にいたる経路に求めることができる。その間の距離は約千数百 km を測る。このルートによって九州に伝播した遺物には、蛇や動物意匠をそなえた装飾土器、土偶、動物形土製品、搬入土器、モデルと考えられる小型土器、有孔鏢付土器、スタンプ形土製品、人物土器、足形土器、刻文付石皿、鯉節形大珠等の翡翠製玉類とその未製品等、多くをあげることができよう。この中で足形土器のように九州独自で展開したものもある。また、この段階から南九州では阿高系土器の底部に見られた鯨脊椎骨圧痕に代わって、土器底部にアンペラ等の組織痕が目立って増加するが、これらの現象は北陸地方の土器製作技術の影響のもと、九州の土器製作技術に変化が起こったものと考えられる。ここで述べた擦切り技法の習得もその一つである。なお、これらの東日本的文物や技術の伝播に伴い人々の移住があったことはこれまで述べてきたところである。

中国地方の日本海側において擦切石斧の新例 3 点が確認できたことは、700 km におよんだ空白部を埋める資料として重要である。両遺跡の位置する周縁部には東日本的遺物の出土遺跡もあり、中継地としての位置づけも可能となる。その意味でも擦切石斧の出土は注目される。

ここで、改めて九州の擦切石斧と他地域との関連性

について検討を加えてみよう。九州に分布する擦切り技法によって製作された製品は玉関連遺物を除けば、いずれも柱状のノミ形石斧に限定されている。各石斧の法量を示すと、向原遺跡例は原石に残る擦切り溝から推測すれば長さ 8.5cm 以上、幅 1.2 ～ 1.7cm、厚さ 1.6 ～ 2.9cm 以内の擦切石斧となり、今村貝塚例が長さ 8.6cm 以上、幅 1.4 ～ 1.8cm、厚さ 1.5cm、頭地下手遺跡例は擦切石斧が長さ 6.8cm 以上、幅 1.25cm、厚さ 1.25cm、擦切石斧の可能性ある石斧が長さ 8.6cm、幅 1.2 ～ 1.7cm、厚さ 1.3cm、麦之浦貝塚例が長さ 4.3cm、幅 1.2 ～ 1.6cm、厚さ 1.3cm、草野貝塚例は長さ 8.3cm 以上、幅 1.4 ～ 1.9cm、厚さ 1.2 ～ 1.5cm である。市来貝塚例、芝原遺跡例は詳細不明である。法量の判明する資料はいずれも基部あるいは刃部を折損している。現存の長さは 4.3 ～ 8.6cm であるが、頭地下手遺跡の擦切石斧の可能性ある石斧は完存していて長さは 8.6cm であり、それを考慮するとこれらの石斧はそれぞれに若干の相違があるにしても、長さは 8.6 ～ 11cm 前後の中におさまるものと考えられる。同様に、幅は 1.2 ～ 1.9cm、厚さも 1.2 ～ 1.6cm の中におさまり、向原遺跡の原石の厚さ 2.9cm 前後は超えないと考えられる。

これに対し、これまで九州の擦切石斧の故地と考えていた韓半島南部においては擦切り技法によって作られた製品はどうなっているのだろうか。前述したように擦切石斧は厚浦里遺跡、上村里遺跡の両遺跡から出土している。厚浦里遺跡からは 9 点の擦切石斧が出土している。その内訳は 25 ～ 30cm の両刃の大型石斧 2 点、15 ～ 20cm の扁平片寄り刃石斧 3 点、長さ 6 ～ 8cm、幅 2.7 ～ 4.8cm の小型の扁平片寄り刃石斧 4 点がある。上村里遺跡例も両刃の大型石斧の例である。また、これまで擦切り具の検討から結合式釣針の石製軸部との関係が指摘（河 1996）されてきたが、慶尚南道蔚山細竹里遺跡（東国大学校埋蔵文化財研究所 2001）からは擦切り具とともに擦切り痕を残した結合式釣針軸部が出土し、擦切り技法と結合式釣針軸部との関連性が明かにされ、結合式釣針軸部の中には擦切り技法によって製作されたものが含まれていることが判明した。以上を整理すると、韓半島南部の擦切石斧は蛇紋岩系の石材を利用して大型の両刃石

斧、扁平片寄り刃石斧、小型の扁平片寄り刃石斧が製作され、併せて、頁岩を素材として結合式釣針石製軸部も製作されている。

九州の事例と比較検討すると、石斧の石材は共通するが、製品は九州が小型の柱状片寄り刃石斧に限定されるのに対し、韓半島南部では大型の両刃石斧、扁平片寄り刃石斧、小型の扁平片寄り刃石斧があり、器種に違いがみられる。また、頁岩製の結合釣針軸部も擦り切りの対象に加わり、その石材にも違いが認められる。さらに、年代的にも大きなひらきがある点にも注意する必要がある。ただし、砂岩製の擦切り具や蛇紋岩を石材とする等、共通点もある。

一方、日本列島における擦切り技法南下ルート of 延長線上にある島根県の新例はいずれも蛇紋岩製のノミ形石斧であり、時期的には絞り込めないが板屋Ⅲ遺跡が中期中頃から晩期、下山遺跡が中期後半から晩期に属し、古い時期を採るなら九州の時期とも一致する。また、福岡市桑原飛櫛貝塚出土の擦切り痕を持つ翡翠原石は糸魚川産と考えられ、これらに加えて東日本の遺物も少ないながら存在することを考慮すれば、九州における擦切石斧はこれらの地域を経由して伝播したと考えるのが最も妥当である。

しかし、韓半島南部からの影響を完全に無視することはできない。漁撈具等の伝播を考慮すれば、当然のこととして擦切り技法がそれ以前に伝播した可能性があり、その重なりが擦切り技法の南下を促し、弥生時代（並行期）には琉球列島まで達したと考えることができる。

東日本の文物の搬入、その影響による展開、新たな土器製作技術、ここで述べた擦切り技法による新たな石器製作技術の定着と展開は、以後の文化を変容・規定していく要素としてその意義は大きい。

6 おわりに

頭地下手遺跡出土の擦切石斧の紹介を兼ねて、九州における擦切石斧、擦切り具について検討を加えた。その結果、旧稿で提示した擦切り技法の九州に伝播してくるルートの一部変更することになった。その要因は各地における発掘調査の展開と資料の増加によるものである。より一歩でも、史実に近付いていればと願

う次第である。

本文を草するにあたり、以下の方々に資料の提供や御教示あるいは文献探索にご支援を賜りました。記して感謝の意を表します。

上床真、池田明生、木下尚子、甲元真之、島津義昭、長家伸、河仁秀、東和幸、松本博幸、宮井善朗、宮崎敬士。

〔註〕

註1 上床真氏（公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター）の教示による。

註2 後期後半～晩期の玉類の製作にあたって擦切り技法が用いられているが、これらについては詳細な検討を行っていないため、また、擦切り技法による製品、擦切り具は南西諸島にも分布するが、ここでは省略する。

〔参考文献〕

井澤洋一、1996、『桑原遺跡群2－飛櫛貝塚第一次調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書480、福岡市教育委員会

任孝幸・権鶴沫、1984、『鰲山里遺蹟』ソウル大学校考古人類学叢刊9、ソウル大学校付属博物館

任孝幸・権鶴沫、1985、『鰲山里遺蹟Ⅱ』ソウル大学校考古人類学叢刊10、ソウル大学校付属博物館

任孝幸・権鶴沫、1988、『鰲山里遺蹟Ⅲ』ソウル大学校考古人類学叢刊13、ソウル大学校付属博物館

河口貞徳、1991、「市来貝塚一昭和36年の発掘について」、『鹿児島考古』25、鹿児島県考古学会
金元龍、1963、「春川校洞穴居遺蹟と遺物」、『歴史学報』20

国立慶州博物館、1991、『蔚珍厚浦里遺蹟』

小林行雄、1951、『日本考古学概説』、東京創元社

沈奉謹、1996、「蔚山牛峯里遺蹟出土新石器時代磨製石器」、『嶺南考古学』18、嶺南考古学会

申鐘煥、1989、「蔚州新岩里遺蹟」、『嶺南考古学』6、熊本県頭地下手遺跡出土の擦切石斧について 397

嶺南考古学会

- 芹沢長介、1965、「縄文時代の研究をめぐる諸問題
—周辺文化との関連—」、『日本の考古学Ⅱ』、河
出書房
- 出口浩・中村直子 編、1988、『草野貝塚—宅地造成
に伴う第1次、第2次緊急発掘調査報告書—』
鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書9、鹿児島
市教育委員会
- 東亜大 schools 博物館、1999、『南江流域文化遺跡発掘
図録』
- 東國大 schools 埋蔵文化財研究所、2002、『図録蔚山黄
城洞細竹里遺蹟』
- 鳥居龍蔵、1929、『西比利亜から満蒙へ』、大阪屋号
書店
- 中島哲郎・牛濱修・長谷川順、1987、『麦之浦貝塚
—本川地区造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

報告書—』、川内市土地開発公社

- 釜山直轄市立博物館、1993、『凡方貝塚』釜山直轄
市立博物館研究叢書9、釜山直轄市立博物館
- 釜山直轄市立博物館、1996、『凡方貝塚Ⅱ』釜山広
域市立博物館研究叢書11、釜山直轄市立博物館
- 三島格、1965、「城南地方の石器と骨角器」、『城南
町史』、熊本県下益城郡城南町
- 山崎純男、1999、「東アジア新石器時代の擦切技法」、
『日韓新石器時代交流研究会・資料集』、新石器
学会・九州縄文研究会
- 山崎純男、2012、「西日本における蛇の装飾」、『尖石
縄文考古館10周年記念論文集』、茅野市尖石縄
文考古館
- 山崎純男、2013、「足形土器の祖形と展開」、『先史学・
考古学研究と地域・社会・文化論』、高橋信武退
職記念論集刊行会